

公募研究 A02 (課題番号: 08205102・09202102)

九州大学文化史研究所所蔵琉球関係史料の研究

研究代表者: 上原兼善・岡山大学・教育学部・教授

1. 研究項目: A02 環シナ海地域間交流史
2. 研究課題: 九州大学文化史研究所所蔵琉球関係史料の研究 (課題番号: 08205102・09202102)
3. 研究期間: 平成8年度・平成9年度 (1996~1997)
4. 配分研究費: 平成8年度 1,400,000円
平成9年度 800,000円 合計 2,200万円
5. 研究組織: (氏名: 所属研究機関・部局・職)
(研究代表者) 上原 兼善・岡山大学・教育学部・教授
真栄平房昭・神戸女学院・文学部・教授

6. 研究目的

本研究では九州大学文化史研究所に所蔵されている長崎天草の石本家文書ならびに松木家の琉球関係史料の情報化と実証的な研究を行うことを目的とする。天草石本家は唐物御用聞として長崎薩摩藩屋敷に出入りし、やがて文政期に同藩が長崎会所を通じて販売する琉球産物(唐物)の代銀引き受けを行うにいたる商家である。いっぽう松木文庫は個人収集文書であるが、天草石本家の本家にあたる平戸石本家の文書を含んでいて、ともに琉球産物の販売状況や薩摩藩の唐物商法を把握するには必要欠くべからざる史料群である。近年近世鎖国制下における対外交渉史研究の進展は著しいものがあり、また長崎口をめぐる貿易のシステムや実態についても中村質氏や、山脇悌二郎氏、太田勝也氏らの研究によって大きく進展をみつつある。これに対し、薩摩藩を抑えの役とする琉球口に関しては、幕藩制国家の支配体系にどのように位置づけるかが大きな課題となって横たわっているといつてよい。本研究ではそうした課題にこたえるための基礎作業として、とくに石本文書を中心にその他関連文書との比較検討を通じて琉球産物の流通システムの解明をはかりたい。本研究によって琉球国の幕藩体制のうえで占める位置がいつそう明確になるであろうし、また琉球国を媒介とした環東シナ地域間の物流システムの解明は、大きな意味で鎖国制研究の深化につながっていくものと考えらる。

7. 研究実施計画

石本家の琉球産物販売関係史料で注目されるのは文政6(1823)年の『薩州に而差出候書面之控』およ

び同7(1824)の『薩州御用向控』と思われたので、本研究ではまず薩摩藩と同家の関係が明確に把握できるこれらの比較的まとまりある史料のデータベース化に取り組む計画をたてた。またそれ以外に長崎における商況などをつたえる書状、仕切状の類が存在するが、現在のところそれらの内容を正確に伝える形にまで目録は整備されておらず、そのため一紙文書の類については、逐一内容の確認作業を行い、関連史料の抽出、その詳細な目録のデータベース化をはかることを計画した。

なお、松木文庫、その他の文化史研究所所蔵文書についても同様に琉球関係文書の調査、目録化、マイクロ化の方針でのぞんだ。

8. 研究経過

平成8年度は研究分担者とともに文化史研究所において石本家文書をはじめとして、島原加津佐の元山文庫史料・長崎平戸の古賀家文書・長沼文庫史料(故長沼賢海九大教授収集史料)等々の検索を行い、史料の目録化、撮影、コンピューターによるデータベース化などの基礎作業を完了した。

ついで平成9年度は研究分担者の真栄平が、石本家文書の『琉球産物商法年継二付御手形を以被仰渡候趣評議仕申上候書付』『文政七年未十月より十二月迄 薩州表ニ而差出候書面之控』『丑八月より相廻ル琉産一件』など主要史料の筆耕を行い、これらの史料が広く利用できるようにした。また上原は松木文庫中の『嘉永六年丑七月払 琉球産物切手本帳』『安政二年卯十一月 卯冬琉球産物切本帳』のフォトリソ化をはかるとともに、その性格分析に取り組んだ。

9. 研究成果の概要

(1) 収集文書の概要

九大文化史研究所よりマイクロ化できた史料は石本家35点、松木家3点に加えて、内務省第一課筆写史料で、常陸、豊後、奥州などより琉球へ漂着した際の関係記録3点、それに『那覇船改方規模帳』である。この内『那覇船改方規模帳』は検討の結果『那覇市史』資料編第1巻収載の「船改之覚」と同一のものであることが判明した。

(2) 石本家文書について

天草の石本家は文化年間(1804~18)の半ば頃より九州諸藩とつながりを持ち、御用達商人として各藩の蔵物の販売業務などにあたっていたが、文政1(1818)年に初めて長崎に出店を設けてのち、文政5(1822)年唐紅毛貿易の入札株を獲得している。このころ石本平兵衛が薩摩藩の唐物方御用聞として長崎薩摩藩屋敷に出入りしはじめたとみられ、十五人扶持を藩より与えられている。

薩摩藩は文政8(1825)年に藩の輸入唐物を琉球産物の名で、長崎会所において、本方商品同様に入札に付されることを許された。その販売代銀から会所の手数料や上納金を差し引いた残りが藩に払い戻される仕組みになっていた。ところが、本方商売の不振によって、会所貿易を支えていた本方商人たちの財政窮迫が著しく、藩の琉球産物代銀の回収も思うようにならなくなった。いわゆる「出後れ銀」が生じてきたのである。藩は石本家に産物代銀の一手引き受けを依頼することによって事態の打開をはかろうとした。史料5713『薩州御用向控』は石本家の引き受け銀高の動向、琉球産物取り扱い銀高、入札代銀高等を記録したもので、史料5710『文政六年未十月ヨリ十二月迄 薩州ニ而差出候書面之控』は同家が琉球産物の販売を引き受け、薩摩藩の銀主となる旨の請書など、薩摩藩との往復文書を収めたものである。

番までの入札高・入札者の順で記載が続くが、「見帳」で注目したいのは品物の出荷数量や価格、商人名が把握できるほかに、品物ごとの総売上げ代銀高が判明することである。たとえば史料5-2で見ると、清記鼈甲は柵屋が1斤当たり203匁で入札し、108斤2合の鼈甲は21貫964匁の売り上げ高となっている。また史料6は宝玲文庫の「端物見帳」で、ほぼ同様な内容がわかるが、反物の場合は反当たりではなく間当たりでの入札であることがわかる。

以上の点から、落札商人の「見帳」は手本帳とともに、商品の数量や商人名、入札高、商品代銀高など、末端における琉球産物の取引に関する情報を多く有する史料であることが明らかになった。

参考文献

武野要子『藩貿易史の研究』（ミネルヴァ書房 1979）

黒田安雄「文化・文政期長崎商法拡張をめぐる薩摩藩の画策」（『史淵』114輯）

馬場誠「長崎村上文書の性質に就いて」（『社会経済史学』第4巻11号，1936）

小笠原小枝・石井千尋「紅毛船唐船琉球産物端物切本帳について」（『MUSEUM』No.456，1989）

石田千尋「長崎貿易の精華 - その輸入品をめぐって -」（『特別展鎖国・長崎の華』神戸市立博物館，1994）

勝盛典子「村上家文書と輸入裂見本帳についての一考察」（『特別展鎖国・長崎の華』神戸市立博物館，1994）

10. 主要研究業績

上原 兼善「豊臣政権と琉球国」（『前近代における南西諸島と九州』多賀出版、1996）

真栄平房昭「琉球王国における海産物貿易」（『歴史学研究』619、1996年）

真栄平房昭「東アジアの海外情報と琉球ルート」（中村質編『開国と近代化』吉川弘文館、1997年）